備える 3.11から 災前の策　第133回　教訓を語り継ぐ

「想定外」なくせるはず

「起きうる全てのことをイメージして備えるのを怠った」。宮城県気仙沼市の元危機管理課長佐藤健一さん(六三)は、犠牲者ゼロを目指して市の避難計画を作ったが、東日本大震災での死者・行方不明者は千三百人を超えた。「この反省を生かしてほしい」と全国で経験を語る。十月末には津波で児童七十四人と教職員十人が犠牲になった同県石巻市立大川小学校を巡り、仙台地裁は市と県の責任を認め、十四億円の損害賠償を命じる判決を出した。学校や行政の命を守る備えがあらためて問われる中、佐藤さんの言葉が重く響く。（塚田真裕）

気仙沼市元危機管理課長

名所・潮吹岩があり、観光地としてにぎわった気仙沼市浦の港路上杉ノ下地区の高台に津波被害者の追悼碑が立つ。六十人が避難し、生き残ったのは六人。海に近く、防災意識も高い地域だった。この高台も、佐藤さんら市と住民が話し合って決めた避難場所だった。

津波の想定高は八㍍。高台は十二㍍。だが、津波は高台を二～三㍍が超えてきた。「ここなら安全だと思った。避難場所を最終的に決めたのは私だと悔やむ。

神合二十㌔には国土交通省の波浪計が設置され、津波が陸地を襲う十～十五分前に、到達時刻や速さ、高さ、浸水域を把握できる設備もあった。だが、地震で通信網が壊れて機能しなかった。一通信網は一重にあり、どちらかは生き残ると思った」と明かす。

二〇〇三年から住民と防災マップを作る防災ワークショップを開いており、初回に防災意識の高い波路上杉ノ下を選んだ。一参加者は多かったが全員ではなかった。百人いれば百人に伝えなければいけなかった。もっと地域に入って活動するべきだった」と話す。

多くの犠牲者を出した今、防災啓発にも、災害発生時にも情報が大切だと痛感している。「災害が起きたとき、具体的にどうなるのか。ひとりひとりがイメージを持てるような伝え方が必要だ」と話す。例えば、津波は海からだけでなく、四方から襲ってきた。震災から得た生々しいイメージを、住民がどれだけ共有できるかが命を守る力になると考える。

当たり前のことだと分かっているが、「災害は誰の身にも必ず起きる。そう思って備えなければいけない」と訴える。反省と悔恨を込めて繰り返し伝えることで、災害時の「想定外」という言葉をなくせると信じている。

犠牲者を追悼する碑の前で教訓を語る佐藤健一さん＝宮城県気仙沼市で

津波で海底から巨石

津波の威力を示す巨石が、宮城県気仙沼市唐桑町の入り江にある。東日本大震災の翌日、一辺が一㍍を超える五つの巨石が岸から打ち上げられた。大きな石は一辺が五㍍を超え、重さは百五十㌧あるとされる。

津波体験館を併設する唐桑半島ビジターセンターの熊谷幸さん(三七)によると、地元漁師が以前、沖合五十㍍、水深二五㍍の場所で見ていた石だという。発見当時は表面に貝類や海藻が付いており、海底から持ち上げられたことが分かる。

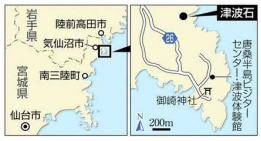
近くにあった七福神のえびすさまが納められた小さなほこらもなくなった。

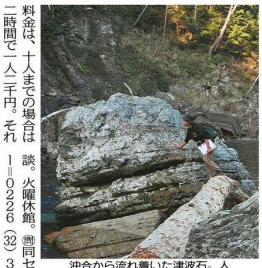
「でも」と熊谷さん。「実は同じ場所に、小さなほこいさまの像が流れ着いていたんです」と教えてくれた。

津波の恐ろしさを後世に伝える遺跡として、多くの人に見てもらおうと道も整備した。地元の気仙沼高校の生徒がごみ拾いをして協力している。

唐桑半島は、自然を体感できる場所として認定された三陸ジオパークの一部でもある。遊歩道かりアス式海岸を眺めたり、山野草を楽しみながら歩ける。

事前に同センターに連絡をしておくとスタッフの案内で見学ができる。ガイド料金は、十人までの場合は二時間で一人二千円。それ以上の団体の場合は要相談。火曜休館。問同センター＝〇二二六(三二)三〇二一





沖合から流れ着いた津波石。人と比べると大きさがよくわかる＝宮城県気仙沼市唐桑町で

歴史に学ぶ ④

避難や情報伝達　災害時のイメージ共有を

避難生活体験　中日サバイバルキャンプ

十月十五、十六の両日に愛知県清須市西枇杷島町の庄内川水防センター（みずとぴぁ庄内）などで避難生活を体験する「備える・中日サバイバルキャンプ」が開かれた。三十組八十三人の親子が、限られた物資で生き抜くすべを学んだ。記者も一部のプログラムを体験してみた。（塚田真裕）

グラウンドに並ぶ段ボールシェルター。寒さと湿気が体にこたえた＝いずれも愛知県清須市西枇杷島町で

段ボールと粘着テープで作れる段ボールシェルターで一晩を過ごした。一人がすっぽりと入る程度の大きさで、風をしのげ、プライバシーを守ることができる。

ダウンジャケットを着て、持参した膝掛けを足元に掛けて就寝。疲れもあってすぐに眠れるかと思ったが…。

どんどん下がる気温。寒さが背中に伝わる。地面からの湿気が、いっそう冷たさを感じさせる。この日の最高気温は二四・四度。日中の日差しは暖かく、半袖で十分だった。それが就寝時間の午後十時には一七・一度に。明け方の午前五時には三・五度まで下がった。体感気温はもっと低い。

東日本大震災の時は雪がちらついたという。想像するだけで体が丸くなった。「早く朝にならないか」。そう願いながら明け方まで耐え続けるしかなかった。

参加した親子はどうだったか。佐藤ひとみさん(四五)、颯建君(三)親子＝名古屋市守山区＝は「寒さより湿気や電車、サイレンの音が気になった」と振り返る。三、四回目が覚めたという。

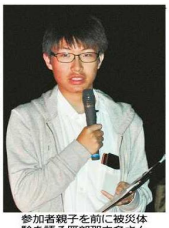
昨年も参加したという桑原陽子さん(四五)、佑季君(一〇)親子＝同市昭和区＝は、今年は厚手の靴下に寝袋、カイロを準備した。さらに床面には段ボールを三重に敷き、地面との間にもビニールシートを敷くなど湿気対策も万全。「よく眠れた」とスッキリした表情だった。

こんな生活が一週間も続いたら…。備えや一工夫が大きな差を生むことを痛感した。

他にも、新聞紙とラップでできる応急処置の方法や新聞紙とレジ袋でできる食器作りなどを学んだ。愛知県稲沢市の木村深雪さん(四一)と悠吾君(一〇)は「（災害が起きる）将来に備えて、たくさんのことを学べた。備蓄や家具固定もしようかな」と話していた。

段ボールシェルター、寒さで寝られず

「親子の思い出を」被災体験語る高校生



参加者親子を前に被災体験を語る雁部那由多さん

「備える・中日サバイバルキャンプ」には、東日本大震災で被災した語り部、宮城県石巻高校二年の雁部那由多さん(一七)も参加。体験から得た教訓を参加者に語った。

当時小学生の雁部さんは石巻湾から二㌔、定川から二百㍍に位置する宮城県東松島市大曲小で被災。一度家に戻ったが、父から近くの女川町に六㍍の津波が来たという情報を伝えられ、再び同小に避難した。

「午後二時半ごろ、津波が来るという情報があり、みんなで校舎の三階に上がり続けた。学校は四月二十一日に再開した。

「クラスには、被災した人とそうでない人がいます。話がうまく合わないので、どす黒い大きな波が押し寄せてきました。

五人の大人が走ってきました。もう波に足を取られていた。一人のおじさんが子どもいました。先生は『震災のことは思い出さないよう』と言い、『助けて』と言ったと思う。でも、手をつかんだら自分が助からない。足元まで水が来ていた。背を向けて三階に駆け上がりました。後日、その方がいなくなったことを知りました」

三日間、何も食べられず、徐々に食べ物が手に入るようになっても、結局半年間、避難所や仮設住宅で非常食のアルファ米を食べた。「みんなで校舎の三階に上がりました。三階に着いたとき、上履きのままだったのを思い出し、玄関に靴を取りに行きました。その時突然、どす黒い大きな波が押し寄せてきました。

震災を思い起こさせる言葉を聞くと泣いたり、気を失ったりすることがあるという。先生は『震災のことは思い出さないようにしましょう』と言い、話してはいけないことになりました」

被災体験を心の奥にしまい込んだまま中学へ進学。だが、二年生の三月、防災シンポジウムに参加したことで転機を迎えた。

「中学生も先生も被災体験を話していました。驚きました。高校生が『自分の中に抱えておくだけでは嫌な思い出だけど、人に伝えたら価値ある情報になる』と言いました。こんなやり方があったんだ、と思いました」

最後に親子にメッセージを送った。

「一日ひとつ必ず思い出をつくって。『また明日』と別れた友達が突然いなくなることがある。お子さんとの思い出をたくさんつくって、心に留めてください。あの時もっとこうしておけば良かった」と後悔しないように。この五年間は生きくても生きられなかった子たちの五年間でもあります。普段何げなく過ごしている一日は、誰にとっても貴重な一日なのです」

「備える」は毎月第一月曜日に掲載を定。次回は十一月五日です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています